迷い猫笑い猫

古城　悠

須田は二度、三度と頷いてみた。

ホテルの一階フロアに入っているカフェラウンジ、テーブルの向かいでは佐々木氏が喋り続けている。すでに二十分くらいは続く一人語り、熱が入ると相手の反応にはまるで頓着しない。極端な言い方をすると、話を聞いていなくともお構いなし、唯我独尊の風を靡かせるのが佐々木氏の佐々木氏たる所以なのである。それが分かっているだけに、須田は真剣に耳を傾けるでもなく、かと言って聞き流すでもなし、どちらにも取れそうなポジションに身を置いていた。会社を辞めてからは、佐々木氏の口説に付き合う機会はなかったが、それでもひとたび向き合うと、昔の間合いは回復された。

一方的に喋り続ける佐々木氏、タイミングよく相槌を入れる須田、その取り合わせは、遠くから見ている限りでは、上司とそのご高説を賜る弱輩サラリーマンの図だった。もっとも、他からどう見えるかなどは関係なく、小うるさい上司だの、算盤勘定に長けた取引先だの、少しだけ親しい友人だの、相手を見て、それぞれに最もふさわしい立ち位置を見つけるのは、須田の場合、ポケットに放り込んだ小銭を整理するくらい当たり前に行う作業でもある。

「何度も言うと白々しく聞こえるんだけどな、本当に感謝しているんだ。お世辞なんかじゃないぞ。俺がお前におべっかを使う必要なんかないんだからな、正直な気持ちだ。先週も、あれの母親と俺との三人で食事をしたんだがな、元気におしゃべりして行ったよ。服買いたいからとか何とか、小遣いまでネダられてなあ、そんなことは一年前には考えられなかった。お洒落して街に出るどころか、自分の部屋からも出てこなかったんだからな。学校の教師が何度も家庭訪問してくれたのに、結局会おうともしない、そんなありさまだったんだ。それがお前に任せて、約半年……、七ヶ月くらいになるか、まあ、それだけの期間で、ここまで持ってきてくれたんだから、本当にすばらしい」

「はい、ありがとうございます」
「いやいや、礼を言うのは、俺のほうだ。実を言うとな、最初は、あれの母親からも、会社を辞めた人間で大丈夫なのかとか、あれこれ不安は聞かされていたんだ。それでも、まあ、俺の見立てを信じろって言って強引にお前を推薦していたんだ。お前は、それにきっちりと応えてくれた、しかも想像以上の成果を伴ってな。それに……」
ふと佐々木氏の視線がエントランス付近に飛んだ。佐々木氏の勢いに水を差すくらいの騒々しさで数人の客が駆け込んできたのだ。俄か雨からの緊急避難らしい。もう少しのところで相槌の必要もなくなっていただけに、須田は佐々木氏に気付かれないよう、こっそりと舌を打った。
「降ってきたか」と佐々木氏。
「そうみたいですね」と須田。
店内には静かにＢＧＭが流れてはいた。それでも日除けのテントをバタバタと叩く激しい雨音は聞いてとれた。梅雨入りしたばかりで、天気予報も俄か雨に対する注意は呼びかけていたので驚くには当たらなかった。ただ闖入者たちの狼狽ぶりは、降り方が尋常のそれでなかったことを物語っていた。

さて、この二人の間ではどのような会話がなされていたのだろう。もうしばらく様子を観察しておけば、それぞれの人となりも明らかになる。会話の流れも推測できるに違いない。だが生憎なことにドラマの語り手はそんな悠長なことは好まない。ドラマにおいては空気のような存在であるべき語り手が自己主張を始めると、目障り耳障りである。それだけでなく何かと都合の悪いことも生じてくる。ただ仕組んだように不都合な選択をするのもドラマたるものの習性であるとすれば、ここでは少しばかり語り手の無駄口にお付き合い願わねばならない。驟雨が会話を中座させたこのタイミングを使って、ドラマの登場人物を紹介しておこうと思うのである。
一人目は須田史章。何かの申請書類風に名前のヨミを書くとすれば、スダフミアキとなる。男。無職。享年三十二才。冒頭の人物紹介で享年という言葉が飛び出すと奇異に響くに違いない。しかし結末を知る語り手としては、そう書く必要がある。知っていても書かないのが語り手としての最低限のマナーだという向きもあるだろうが、この語り手はそう

した最低限の何とやらも心得ていない。ドラマは不都合な選択をすると書いたが、こういう軽薄な語り手に進行を委ねてしまったのも、不都合の一つと言っていい。

須田史章は、二年前までは大手の制作プロダクションで営業を担当するサラリーマンだった。入社五年目には自ら発案したキャンペーンに、行政を始め多くの関係先を巻きこんで成功を収めた。そのキャンペーンは、会社にも多大の収益をもたらしたので、彼は特別褒賞を受け、それ以来、統轄本部長の佐々木光致の知遇を得るようになった。

しかし、二年前の九月、彼はある病気が原因で辞表を書いた。その時の病気というのは、たぶんに心の領域に関するものだった。精神病理学の専門的な知見は持ちあわせていないので、厳密さを求められると困るのだが、恐らくは「鬱病」と呼んでも構わない症状だったと思われる。厳密さ云々と予防線を張ったのは、彼のケースでは、誰の目にも病気と分かる顕著な疾患症状が顕れていなかったからである。外見上の変化を挙げるとすれば、粗放な格好での出勤が多くなったことだろう。もちろん、生来のセンスがない人間に身だしなみのコーディネートを求めて意に添わなかったとかの話をしているのではない。彼の場合、ファッションのセンス、会話のセンス、それに勤務態度、どれをとっても平均点をはるかに越える評価がなされていた。それに何よりも、実績があり、将来も嘱望されていたことが大きい。そういうポジションにいた須田だったからこそ、まるで別人になったかのように、彼らしからぬ格好で現れるようになったのが不審がられたのである。もしも見てくれの姿格好は仕事に取り組む姿勢を映し出すと言う人がいるとすれば、語り手は全面的に首肯する。事実、不審な目を向けられるようになってほどなく、会議での集中力欠落やレポートの提出遅滞なども目に付くようになった。同僚たちの中には、彼の変貌を眺めては、

「ああいうのを、燃え尽き症候群って言うのかな」

と言う者もいれば、

「いやいや、もしかして後発性五月病なのかも知れんぞ」

などと言う者もいた。それ以外にも実に様々な病名が取り沙汰されたのであるが、揶揄も含め、わかった風な病名を付けるのは好意的な友人たちで、実績に対する嫉妬が先行していた人たちであれば、

「増長して怠慢をかましているだけだ」

と露骨な誹謗を口にしていた。

彼の変化は、同僚や直属の上司だけでなく、本部長の佐々木の耳にも届いた。ただ佐々

木には、会社の業務と有望株の将来の両方に目配せをするだけの才覚があった。彼の状態に病的なものを察知すると、まずは二週間の休暇を取らせた。そして同時に正田真希子、佐々木の秘書であり、後ほど紹介するが、その正田真希子に様子を窺わせていた。だが、そういった佐々木の配慮は報われることはなく、待遇は休暇から休職に変わり、半年後には退職を勧告せざるを得なくなった。須田史章はそれに従った。

佐々木光致（みつとし）。男。五十二歳。大手の制作プロダクション勤務。業界では伝説ともなっているイベントをいくつも仕掛けた遣り手のプランナーで、現在では統轄本部長の要職にある。

佐々木の名前を一躍有名にしたのは、某地方都市の施策としての博覧会企画だった。現在でこそ博覧会風のイベントは各地で開催されているが、大きな規模のイベントは人口の多い大都市でしか開かれていなかった時代である。そんな時代に、佐々木は、その地方都市の潜在的な可能性を見出し、交通機関や雑誌・テレビ等のメディアを巻きこんだ一大キャンペーンを実現させたのである。第三者的な評伝風に書く場合は、発想の柔軟さや時勢に対する鋭い嗅覚が大きく取り上げられるのだが、近い立場の人は、目標を絞った時に佐々木が見せる貪欲なまでの行動力に高い評価を与えた。

性格は豪放磊落で親分肌、そして面倒見のよさから多くのシンパに恵まれたのも、彼の人柄を語っていた。営業課の一社員、須田史章の勤務態度が問題視されるようになった時、戯画的な小言を繰り返すばかりの課長に向かって、

「わかった。当面の仕事からは外すことにしよう。あとは俺に任せてくれないか」

と言って、その処遇を引き受けたのも、佐々木らしい行動だった。しかし、一方で独断専行の誹りを受けていたのも事実で、味方と同じくらいの数で敵もたくさん作っていた。かつて「付きあい方心得」なる落書が陰で回覧されたことがあった。この落書は、悪戯の類だったが、佐々木光致に対する微に入り細に入った観察が反映されていて、読んだ人を大いに楽しませた。と同時に、その近くにいる造反者の影も噂となった。

正田真希子。女。三十四歳。佐々木統轄本部長の専属秘書である。須田の処遇が本部長預かりとなって、連絡係を任されたことがきっかけで須田とは懇意になった。彼女が須田の前に現れる時、当初は本部長秘書としての登場だったが、面会を重ねるうちに、単なる連絡係ではない、彼女本来の顔も覗かせるようになった。たまたま波長が合ったと解釈すればいいのだろう、仕事として須田の体調を確認するだけでなく、もう少し踏み込んだ話もするようになった。須田の待遇が休職扱いとなる頃には、待ち合わせの場所と時間を決

めて一緒に食事をするといった、平凡なカップルがそうするのと同じような、平凡なデートも重ねるようになっていた。

彼女が須田と会っていたのは、一週間に一度か二度のことだった。須田がまだ休職扱いだった頃からその頻度で、会社を辞めた後もペースは変わらなかった。ペース同様、二人の間で交わされる会話にも、大きな変化は見られなかった。須田が仕事を辞めたのであれば、これからどうするのかなどの話が出てしかるべきだったが、その件を話頭に挙げないのは、二人の間で暗黙裡に出来ていた申し合わせだった。待ち合わせのコーヒーショップで世間話をした後は一緒に食事をする、時たま映画を見たりして時間を過ごすといった具合の、まったくの成り行き任せ、ありふれた付きあい方だった。ある晩、どちらが誘ったわけでもなく、ホテルで肌を重ねたのが成り行きであるとすれば、一緒に暮らすようになったのも、やはり成り行きとしか説明のしようがなかった。

川北裕美子。この十四歳の少女も、このドラマには欠かせない登場人物である。佐々木の姪に当たり、先程来の佐々木の話では「あれ」と呼ばれていたはずである。彼女の詳細は、追って明らかになるので、贅言を並べるのはこの辺りで止めておこう。

雨脚が弱くなってくると、店内は落ち着きを取り戻した。佐々木氏は一息ついて、氷だけになったグラスを傾けた。カランと涼やかな音が鳴る。

「ところでな、どうして俺がお前を使ったか、分かるか」

須田の心得ている間合いでは、ここは言葉を挟むタイミングではなかった。かの「付きあい方心得」でも、佐々木氏との会話では、質問めいた言い回しが話題転換の道具として使われることがあるという注意事項が紹介されていた。案の定、佐々木氏は須田が答えるのを待つことなく、話を進めた。

「それはだな、お前が生まれながらにして持っているものに期待していたからなんだ。不登校や引きこもりといった形で問題を限定してしまうなら、あれが通っている学校にも昔の学園モノに出てきそうな熱血先生だって、対応マニュアルを読み込んでいる専門のカウンセラーだっているんだ。しかしだな、そんな連中よりは、お前のほうがずっと適任だと思ったんだ。それはだな、お前には話相手の気持ちを柔らかくする能力があるんだ。腰が低いとか、人を立てるコツを心得ているとかいった、頭で考えるノウハウじゃない。要す

るにお前と話をしていると、どことなく気持ちよくなるんだ。今回は、あれの心を開くことが目的になっているんだから、お前ほどの適任者はいない……」

佐々木氏の口調は再び加速し始めた。会話といいながら、会話を成り立たせないタイプの喋りをする人間は、珍しいものではない。須田が営業廻りをしていた中で出会った人々の中にも、そういう種類の人は少なからずいた。たとえば、一方的に自らの考えをまくしたてて、割り込むためのタイミングを相手に与えない喋り方をする人間、目の前にいる佐々木氏はその典型になるのだが、自らの世界に没頭しきって、話相手の存在が目に入らなくなるのだろう。そうしたタイプの人は基本的にはやたら早口にできている。逆に落ち着いた口調で語り聞かせるように喋っていても、言葉が挟めないタイプもある。一つひとつ言葉を選びつつ喋っているので、口を挟もうと思えば、簡単にできそうなのだが、いざ向きあって話していると、「うー」とか「むー」とかの持続音が発せられて、割り込んでいいのかどうか判断に困るのである。あるいは、口癖の一種なのか、「なあ、そうだろう」などの調子で、ところどころで相槌を求めながらも会話の主導権は譲ろうとしない人もいる。相槌に続いて逆接の言葉を入れようものなら、続きを聞きもしないで「まあ、待て、こっちが喋っているんだ」とかの具合に、露骨に独占欲を発揮する。このパターンは目に前に相手がいることを十二分に承知しているので、積極的に相手の介入を拒んでいることになる。そういう人種の場合は、喋るだけ喋ってもらって、その後でポイントを要約する形で確認するだけで十分だった。もちろん、延々と喋ってもらった内容を一言二言でまとめてしまうと、先方の気分を害するものだが、外国映画の字幕版でよくあるような感じで、スクリーン上の人物は圧倒的な量の言葉を口にしているのに、字幕のほうが一行その辺でまとまっているケース、そんな大胆な要約をぶつけない限りは、納得してもらえることが多かった。

目の前では佐々木氏の話は、依然として続いていた。

「お前自身が自覚しているかどうかは関係ない。俺が見るには、お前には才能の次元で備わっているものがあって、それが相手の気持ちを楽にさせているんだ。空気というか、雰囲気が相手を心地よくさせている。そういう才能があるというわけだ。営業の成績が良かったのも、そういうところと無縁じゃなかったはずだ。才能というのはだな、努力して獲得できるものじゃない。だからこそ才能の次元で持っているものと、それを生かす仕事とが巡り会うと、大きな成果が生まれる。誰しも、何らかの才能は持ち合わせて生まれて来ているんだが、世の中、うまく出来てるというか、ほとんどの連中は、自分の才能とは関

係のない仕事をやっている。だから物事をうまく処理できる少数の人間と、ヘマばかりやらかす大多数に分かれるんだ。そのバランスで社会は動いているんだが……」

佐々木氏の持論は、須田が会社勤めをしていた頃にも聞かされた覚えがあった。「俺は同じ話は二度とはしないものなんだがな」という前置きに続いて、何度か聞かされた話で、それに合わせると、この後の結論も容易に推測できた。適材適所の人材配置が事の成否を決めるのであり、そのやりくりを巧くこなすのが佐々木氏自身の才能であるという自慢話、落としどころはその辺りになるはずだった。そのため須田の関心は、話の行き先ではなく、もっぱら佐々木氏の小鼻が動くかどうかに向かっていた。「付きあい方心得」が言うところの、佐々木氏が企み事を隠している時のサインである。

一時間ほどの独擅場を演じた後、佐々木氏は、もう一件約束があるからと言って席を立った。一緒にホテルを出て、佐々木氏が地下鉄に下りていくのを確認してから須田はホテルのロビーに戻った。人待ち風の客がたくさんいる中に混じって、ソファーに腰を下ろし、佐々木氏との会話をふり返ってみた。長くても結局は簡単に要約できてしまう話だった。今回は、よくやった、ありがとうとだけに置き換えてもよさそうなものだった。そうなると、思いは自ずと別なところへ向かい、初めて裕美子と会った時のことから、この半年近くのことを考えていた。

始まりは、須田が会社を辞めて二年ほど経った頃、佐々木氏から連絡があって、頼み事があるんだが時間を取ってもらえないか、と持ちかけられたことだった。賀状のやりとりくらいはあったが、その頃はそれだけの間柄になっていたので、意外な思いもあった。とはいえ、正田真希子のマンションに居付いてしまっていたこともあって、須田が考えていた以上に、その動静は佐々木氏に伝わっていたはずである。

久しぶりに面会することになった佐々木氏に対して、須田は型どおりに無音を詫びた。すると佐々木氏は、わははと笑って堅苦しいことは抜きにしようと言った。そしてあれこれの近況の話があった後、持ちだされたのが、姪の家庭教師を頼みたいとの話だった。川北裕美子という名前のその子供は、佐々木氏の姉の娘であり、事情があって佐々木氏が保護者の立場にいる中学生らしい。須田は、大学生だった頃、片手間のアルバイトでやったことはあったが、家庭教師と名の付く仕事の経験はそれだけだった。それで、畑が違いすぎているからと断りはしたのだが、佐々木氏の中では、須田が引き受けるところからストーリーが始まっていた。

「まあ、聞いてくれ。本当のことを言うと、家庭教師なんて名前だけのことなんだ。実はな、ちょっとワケありで登校拒否になってる子なんだ。それでまあ、ちょっと話し相手にでもなってもらえれば助かるんだが、どうだろう。時々遊びに行ってやって、何なりとおしゃべりでもしてきてくれれば、それでいいんだ」

「いや、それでも私では役不足だと思うんですが……」

「そんなことはない、営業と同じだ。飛び込みでナシを付けてくることを思えば、ずっと簡単だ。お前がいつもやってたことだろう。難攻不落の営業先を落とす時には、あの手この手で話の取っかかりを付けていただろう、それと同じだって。何でもいいから話をしてやってもらえればいい。それにちょっと身贔屓な言い草にはなるんだが、実際には素直でいい子なんだ。ちょっと他人（ひと）との付きあい方が分からなくなっただけのことなんだ。取り付く島もない相手というわけじゃないんだから。とりあえず始めてみてだな、手探りでもいいから、何なりと遊んでやってくれたらいいんだ。あとは時間が解決してくれる。それに、まあ、それなりの手当もさせてもらうから、なあ、頼むよ。俺を助けると思ってだな、一肌脱いでくれないか」

須田がいまだ定職を見つけていないことは、正田真希子を通じてだろう、佐々木氏は知っていた。それに情を絡めたところで懇願されると断り切れない。もちろん、こうした進め方に長けているのも佐々木氏の一面であり、相手が須田であることを踏まえての交渉だった。実際は、交渉というよりは、佐々木氏主導で進められる詰め将棋、最初から結論は決まっていた。これはどうにもならないようだな、そう須田は思った。

こうして、うやむやのうちに押し切られて始まった川北家訪問だったが、半年後に感謝と賞賛の言葉を浴びせかけられることになろうとは思ってもいなかった。むしろ、最初の日などは安易に引き受けたことが後悔されるくらい、惨憺たる日となった。というのも、訪問した直後に川北裕美子と引き合わされる段取りになっていたのだが、肝心の裕美子が自室に鍵を掛けて出て来なかったのである。母親の川北裕香里はおろおろして申し訳ありませんと繰り返すばかりだった。須田にしても母親の詫び言を聞いて帰ってくるだけでは、埒が開かないのは分かっていた。しかし、ではどうするのがいいかとなると、それは思い付かない。それで、とりあえずは裕美子の部屋の前で一方的に喋ることにした。

最初は自己紹介、反応なし。続いて天気の話、反応なし。それから川北家までやってくる途中で目に留まった物事の話をしてみたが、やはり反応はなかった。

この時点で、これはどうにもならないことに手を付けたのかも知れない、そう須田は考

えるようになっていた。どうにもならないことを、どうにかせねばならないのは厄介極まりない仕事であり、往々にしてどうにでもなれという方向へ傾く。初日は廊下で一人語りを続けたり、裕美子を岩屋戸に籠もった天照大神（あまてらすおおみかみ）に準えて部屋の前で歌ったりしてみた。ドアの向こう側では物音もしていたので、興味は示しているようにも思われたが、それっきりだった。

二日目と三日目は、相も変わらぬ一人語りや、間が持たなくなった場合に備えて用意してきた本の朗読で時間を費やした。ドアが開かれたのは、数えて四日目のことだった。正確に言うと、開かれたというよりは、閉じられていないことに気づいたとするほうがいい。

時間通りに須田が裕美子の部屋の前に行ってみると、ドアの位置がほんの少しずれていた。わずか数センチ、ほんの小さな変化だが、ドアが閉じられていないことを告げる大きなメッセージだった。須田は小さくノックしてみた。返事はなかった。今度は、少し大きな音が出るノックをしてみた。すると内側から、「開いてる」と少女の声が返ってきた。ノブを引いてそっと部屋の中を覗いてみると、裕美子は机に向かって座っていた。そして、じっと来訪者の顔を見つめていた。須田が初めて裕美子の姿を見たのは、この時だった。

須田はロビーのソファーに座ったまま、じっと周囲の人々を眺め回してみた。ここにいる人々は、それぞれの目的があって、この場所にいるのだろう。ドレスや着物で煌びやかな装いを固めているのは、これから始まる披露宴の開場待ちに違いない。書類をめくっては忙しげにメールのチェックをしたり、隣の若い男と言葉を交わしているのは、仕事の打ち合わせで取引先の関係者を待っている上司とその部下。にこやかな顔つきで数人の外国人を相手に話をしているのは、サービス精神旺盛な観光ガイドだと思われる。白いバラとほんのりピンクがかったユリの花が飾られている。中央に置かれたその大きな花瓶を取り囲むようにソファーが並べられ、それを埋めた二十数人は自分たちがなぜこの場所にいるのか、その理由を誇示しているようでもあった。花瓶の花までもが、自らが主役であることをアピールしているようにも見えた。

目的も持たず、周囲の挙動を眺めているだけの自分はきっとこの場所に不釣り合いな人間に見えているに違いない、そう須田は考えた。あるいは目的を持っていないのが理由なのではなく、この場所で誰とも言葉を共有していない、そのことが不釣り合いさを際だたせているようにも思えた。その場所にいる人々、その場所で起きている出来事、それらとの間でコミュニケーションが図られていれば、そこにいる意味合いも見出される。しかし、

このロビーでは、須田はただ物理的に空間を占拠しているだけだった。
それは川北家を訪れてから、初めてドアが開かれるまでの間と同じだった。ドアの向こうにいるはずの相手に向かって、メッセージを送りはしても、本当に届いているのかどうかの不安は拭えなかった。初日に物音がしたので、向こう側の相手は、きっと関心を示しているに違いないと考えたが、もしかすると何かの偶然を勘違いしているのかも知れない、そんな不安も高まりつつあった。こちら側にも伝わってくる形で嫌がられているのなら、たとえそれが拒否の気持ちを伝えるものであったとしても、明確な反応であるには違いない。そして反応があるだけ救いになるはずである。しかし、最初の三日間は、まったくの無反応だった。何のためにこの家に来ているのだろう、ここへ来て何をしているのだろう、そういう疑念も頭を過ぎりはじめた頃だった。それだけに四日目になって返ってきたメッセージには大きな意味があった。
ロビーの須田の前では微かな変化が起きていた。須田の場所からちょうど向かい側に腰掛けていた西洋人マダムと視線が合ってしまったのである。そして次の瞬間、マダムは小首を傾げて口元を緩めたのである。それは正真正銘の日本的会釈だった。日本人の会釈は外国人には理解できないとか、気味悪がられるとかの話はよく聞くところだが、マダムが見せた純日本的な会釈は、見知らぬ相手にそうすることが日本のマナーと思いこんでの行動だったのか、単純に須田を知り合いと間違えただけなのか、須田も釣られて会釈を返しはしたものの、その後は何もなかったかのように周囲はすべて他人になっていた。マダムの視線が目の前のガイド氏に向いているのを確認して、須田は天井に目をやった。意識の中からマダムが消えると、思いは再び裕美子の上に戻っていた。

初めて見た裕美子の印象は、思い描いていた姿とはかけ離れていた。佐々木氏や母親の川北裕香里の話は、登校拒否と引きこもりに重点が置かれていたので、裕美子像もどんよりとした空気を発散させる少女、そんな湿っぽいイメージとなっていた。ところが、実際に会った裕美子は、見かけの印象は普通の少女であり、高校生あるいは童顔の大学生だと言っても通じるくらいの、幼さを感じさせない雰囲気を持っていた。加えて強い印象を残したのは、ドアを開いた最初の瞬間に感じた、鋭く突き刺さってくる目線だった。
「えーと、入らせてもらってもいいのかな、須田っていうんだけど……、あの、家庭教師をやることになってる須田……」
後ろめたいことをしているわけでもないのに、語りかけた言葉は何かを弁明をしている

かのようで、しどろもどろになっていた。すると裕美子は、少し間を置き、しかしそれでもはっきりとした声で「知ってる」と言った。そう言うと同時に口元が小さく微笑んだようにも映った。冷たかった空気が少し暖かくなった。最初の瞬間に強烈な眼差しを向けられたせいか、弁明風になっていた口調も、警戒が解かれるにしたがって滑らかになった。改めての自己紹介に続いて、家庭教師を頼まれてやってきたのに岩屋戸の前で途方に暮れていたとかの話、それから突然の光明が差して扉が開かれました云々と、会話の取っ掛かりにするためのデタラメ物語もすらすらと流れ出た。それにしたがって興味深そうに不思議なものを観察する雰囲気に変わっていった裕美子の眼差しだったのだが、喋りながらも須田の脳裏に刻まれていたのは、最初に向けられた時の鋭さだった。そのイメージを何かの比喩を用いて説明するとすれば、猛禽の目などが選ばれたかも知れない。それが鷹であれ、鷲であれ、実際どんな目をしているのか、じっくり観察したことがなくても、「猛禽」という字面が喚起する、今にも噛みついてきそうなイメージを具体化させた目線だった。言ってしまえば、その時の裕美子から投げつけられた目線を想い描いておけば、それはきっと鷹や鷲のそれと重なるに違いない、そんなイメージなのである。あるいは「上空から地上の小さな獲物に狙いを定めて急降下する猛禽」という野生の獰猛さをいう凡庸な表現を想定したとすれば、それが文字だけの時はベタな言い回しに過ぎなくても、裕美子が見せたそれを重ねてみると生々しくなる、そんな目線だった。要はこちらの内側にあるものを目敏く見つけては、グイっとえぐり出してしまう鋭さだったのである。

ともあれ、ドアは開かれ、須田は受け入れてもらえたらしい。それからの須田の仕事は、順調に進んだ。佐々木氏が言ったように、営業のノリで勢い任せの口上を並べているだけでも、それなりの形にはなった。最初のうちこそ沈黙の時間を作らないように気を配ることも多く、わざとらしい話題を振ってみせる必要もあったが、日を重ねるにつれて自然な会話も交わされるようにもなった。時には本当の家庭教師らしく英語や数学の教材を引っ張り出してくることもあったが、裕美子の部屋で過ごす時間は、もっぱら本の読み聞かせが中心となっていた。須田が持ってきた本だけでなく、時には裕美子のリクエストに応じて本が選ばれることもあった。それらを須田が仰々しすぎるくらいの抑揚で音読したり、時にはストーリーから脱線して余談に持っていったりして、三時間四時間と午後のひとときを過ごしていたのである。

須田の見立てによれば、裕美子は朗読の中身よりも、近くで誰か他の人が音を立てている行為に反応しているようだった。事実、読み聞かせているのは新美南吉でも加藤喜一郎

でも村上春樹でも構わなかった。その日に取り上げる文章はコピーにとって裕美子に渡しはしても、裕美子が文字を目で追うのは初めのうちだけで、そのうち視線が須田に向いてくる。そうなると、須田も忠実に字面を追うのではなく、パフォーマンス的な要素を盛り込むようになり、裕美子がそれを面白げに眺めている、そんな展開が多かった。思うに、裕美子は一人の世界に閉じこもってからは、外から入ってくる言葉を遮断してしまった、それが何かの弾みで波長の合う言葉と巡り会った途端に欠落していた部分の埋め合わせをするようになって、そこに心地よさを見いだしたのだろう、そう須田は解釈していた。

須田が裕美子を初めて戸外を連れだしたのは、四月上旬のことだった。川北家の近くには有名な桜スポットがあり、須田は行きがけに立ち寄って桜の花びらを集めてポケットに忍ばせていた。

その日は有吉佐和子の『出雲の阿国』を読む予定にしていた。鹿ヶ谷の花見の段である。読み始めてほどなく、阿国が二度目の踊りを始めた場面でポケットの花びらを机の上に散らしてみた。

「うわぁっ、本物だ、どうしたの、これ」

「実はこのポケットの中には桜の木が生えているんだ、ほら」

そう言って、須田はもう一掴み、花びらを撒いてみせた。冗談には反応せず、裕美子は机の上に散らされた花びらを摘み上げては撒いて、また摘み上げては撒いてと繰り返していた。そして言った。

「ねえ、知ってる？　近所に桜で有名な場所があるんだよ。この家に引っ越してきた頃は毎年見に行っていたけど、去年も一昨年も行っていないかな」

「じゃ、これから見に行ってみようか」

「うん」

それ以来、気晴らしになるような場所を思い付くと、時々裕美子を連れ出すようになった。近くなら三十分程度で帰ってくることもあったし、少し遠出をする場合は電車に乗ることもあった。当初は口数も少なかった裕美子だが、外出をするようになると、カップル気取りで須田の腕を取ってくることもあった。

母親の川北裕香里は、初めのうちは階下で不安げに様子を窺っていたが、娘が須田を受け入れてからは、すぐに勤め先に戻るようになった。そのうち、須田が来る日でも朝からの出勤が当たり前になっていたので、何をするにも須田と裕美子の自由裁量となっていた

のである。

佐々木氏が言うには、川北裕香里は輸入雑貨の店を持っており、経営も順調に行っているらしい。ビジネスの世界なので、趣味とセンスだけで事がうまく運ぶわけではない。そうした意味では、母親の川北裕香里にはビジネス面での才覚もあったのだろう、言うなら辣腕の女社長といったところなのだが、アドバイザー的に佐々木氏が噛んでいることは容易に想像された。仕事面以外でも佐々木氏は、男親のいない川北家に深く入り込んでいて、裕美子の父親代わりともなっていた。そうした家庭環境も併せて考えるなら、須田が任された役回りは、佐々木氏から求められていた、ちょっとした話相手であると同時に、母親不在時の子守役といってもよかった。

岩屋戸の中で息を殺していた裕美子、須田の朗読を観察していた裕美子、カップル気取りで須田と並んで歩いた裕美子、その変貌を辿ると、佐々木氏が「一年前には考えられなかった」と言うのも誇張ではなかった。しかし、熟慮した方策に則って施した治療が効果を現したのではない。行き当たりばったりのデタラメがこうした結果となったに過ぎない。営業で駆け回っていた頃、同僚の中に巡り合わせによる偶然を自分の才覚のごとくに言う人間がいて、須田はその人柄を脳天気すぎると評しては時には愚弄もしていただけに、裕美子の件で佐々木氏が繰り返す感謝の言葉は、いくらなんでも仰々しすぎる、そう須田には思われた。仮にその言葉を額面通りに受け取ったとしても、面映(おもは)ゆく感じるよりは、むしろ小馬鹿にされているようにしか聞きなすことができなかった。それ加えて佐々木氏が口にした一言、繰り返し感謝を言った後で、「お前に子供を調教する才能まであったなんて知らなかったよ」と漏らした一言が、須田の気持ちを必要以上に攪乱させていた。漫然と聞き流していたこともあり、反射的に抵抗を覚えたのではなかったが、時間が経つとともに居心地の悪さを増してゆく言葉もあるらしく、須田にとっての「調教」はその一つ、発した側の何気ない一言を、受けた側がまったく違う印象で捉えてしまうケースとまとめるのなら、この日の打ち合わせを「今後のことも含めての作戦会議だ」と言った佐々木氏に対して、仰々しい言い方をするものだなあと怪訝に感じたのは、ほとんど前触れだったとも思えるのだが、ただ軽々しく右から左へ流れただけで以降は意識をかき乱すこともなかった「作戦会議」なる言葉とは異なって、「調教」はいささか重たかった。どういう方向へ裕美子を持っていこうという意図は持ちあわせていなかっただけに、強い志向性を含む言葉に棘を感じたのか、犬やイルカに芸を仕込むようなイメージを当てはめられたとこ

ろに座りの悪さを覚えたのか、それとも、その言葉が口の端に上ったことで佐々木氏が抱いているに違いない底意を嗅ぎ取ってしまったのかも知れない、などなど行き着く先も見えない疑念の深みに足を取られたようで、聞かなかったことするなら綺麗に片づくのに、どうしても流れてくれない言葉として、「調教」は須田の中にべっとりと貼り付いていた。

ロビーにある大きな柱時計は作戦会議が終わってから一時間近くが経ったことを告げていた。それは同時に鬱々とした物思いを繰り返していた時間でもあった。気を取り直してホテルを出るにしても、これといった目的も持たずに繁華街を歩くしかなかった。激しい通り雨は、路上のゴミといっしょに街なかの暑苦しさも洗い流していたが、肌が感じる心地よさとは裏腹に、雑踏の中、依然として落ち着く場所を見い出さない言葉の不快感は持て余されていた。深くは考えずに口をついて出ただけだったとしても、「調教」という言葉が発せられたのは消すことのできない事実であって、裕美子を「調教」しているという捉え方が保護者から示された以上は、嫌でも黙ってそれを受け入れるか、それとも敢えて拒むのなら「調教」に替えてこちらの立ち位置を明確にする言葉が求められるのは当たり前、そうなると不登校に至った経緯にはわざと目を向けないようにしてきたことがよかったのかどうかも問われることとなり、ひいては裕美子と接してきたこの半年間はなんだったのか、それ自体も疑われてしまうことになってくる。もちろん、この半年は裕美子の心の治療に携わってきたのではなく、ゼニカネのための請負だったに過ぎないと開き直ってしまうのも一つの意思表示なのだが、ゼニカネというのなら裕美子が日常会話を取り戻した時点で業務は完了、請け負って半年、大きな成果を残して万々歳の大団円、逆に開き直りを許さない立場に重心を移してみると、行為の意味を考える機会はたびたび与えられていたのに、それから目を背け続けたのは、いつも逃げ道を探していた姑息さを認めることになり、そうした折りに「調教」という言葉に居心地の悪さを感じているのは、自分が関わらない場所で描かれた青写真に対する抵抗、そんな一面が幾分かはあるにしても、大部分は身勝手以外の何物でもなかった。

前方の一画に異様な気配が漂っていた。自然に流れるはずの人々の動きが、汚いものを避けるように、一つの場所を迂回していた。迂回して通るその真ん中には一人の男、猫背気味で半身を少し傾け、肘をたたんだ腕を軽く手前に突き出した姿勢、そして眼球の動きも静止させるよう努めているらしく、さながらマネキン人形のポーズになるわけだが、本物のマネキン人形ならいざ知らず、生身の人間がそんなポーズを取っていると、一見する

だけで不気味に映るこの男は、実は目にするのは三度目のことで、一度目は多くの人々がそうするのと同様、関わらないように男の場所を迂回してやり過ごしたが、パフォーマンスのつもりでマネキンのポーズをとり続けていることが察せられた二度目は遠目で観察もして、そして今回が三度目の遭遇、周囲の様子を窺うと、ほとんどの人は一瞥はくれてもすぐに視線を余所に移して通り過ぎていた。マネキン男は行き交う人々のほぼすべてが見て見ないふりをしているのを知って凝固を続けていた。

「佐々木さんとの打ち合わせで出かけます」

マンションに戻ると、ダイニングルームの伝言板には、数時間前に須田が書いた文字が、書き付けられた時と同じ状態で残っていた。まだ正田真希子の戻ってくる時間ではなかった。佐々木氏との面会だから時間を要するだろうと予想していたのだが、案外、手早く片付いたらしい。須田は、まず役目を果たす機会に恵まれなかった文字を消した。それからポストに押し込まれていた郵便物やチラシを整理した。整理といっても、正田真希子様と手書きでの宛名がある一通を取り分けただけである。ここが正田真希子のマンションだったとしても、宅配ピザのチラシやＤＭの類をゴミ箱へ放り込むことは、許可を求めたり、報告をしたりする必要はない。続いてリビングでテレビのスイッチを入れた。夕方のニュース番組では、キャスターが深刻な顔つきで何かを喋っていた。二週間前に聞いていても、二週間後に聞いても、どちらでも驚きそうにない事柄だった。まるで歴史的大事件の現場に立ち会ったかのような口調で日常茶飯事を語る態度、世の中の正義を一身に背負って奮闘しているのだと言わんばかりの物言い、たまらなく不快だった。それでも、スイッチを入れたのは番組を見るためではなく、習慣化された一連の動作なのだ、誰彼なく届けられるＤＭやチラシをゴミ箱へ放り込むのと変わらない、そう思ってしまえば、虚しい敵意も鎮まっていた。

須田はそれから玄関横の部屋へ移った。３ＬＤＫのマンションである。奥の一部屋は正田真希子の寝室であり、その手前の一部屋は会社から持ち帰ってきた仕事を処理するために使われていた。須田が同居するようになった頃、玄関横の残る一部屋は、正田真希子が言うところの水族館だった。

外で会っていた頃は、そんな素振りは見せなかったのだが、正田真希子はたくさんの水

棲動物をマンションで飼っていた。うるさいのは嫌なのだろう、犬や猫には興味を示さない一方で、水の中を泳いでいる生き物を見ていると気持ちが落ち着いてくるらしい。水族館には、熱帯魚はもちろん、亀だのクラゲだのの水槽が置かれていた。

最初の頃は、その部屋は訪問客が来た時のゲストルームだった。水槽も小さいのが一つ、部屋を飾るワンポイントに置かれていただけだった。ところがペットショップで見ていると他の魚も欲しくなり、水槽の数も三つ四つと増えていったという。そうして結局は七つの水槽に分かれて暮らす水棲動物、すなわち熱帯魚、クラゲ、亀、ウーパールーパらが部屋の主人となり、水槽はスペースを贅沢に使って床一杯に並べられた。

マンションに須田が出入りするようになると、今度は須田のために一部屋が宛てられた。ウーパールーパ一種類だけの小さな水槽はリビングに移動させることができたし、大きなものも配置を整理するだけで、水族館は、そこで人間が寝起きしていてもおかしくない空間となった。そうしてそのまま須田の居場所となったのである。

一緒に暮らすようになってからも、須田には正田真希子の趣味は理解できているわけではない。派手な色合いの小魚を十把一絡げに熱帯魚と呼んでいるくらいで、メダカを指してテトラの一種と言われても鵜呑みにしたに違いない。亀に至っては、イシガメだのミドリガメだの言われてもいまだに識別ができないのは、甲羅があって頭と尾があって手と足が二本ずつ付いているものを亀と呼びならわし、それ以上は分類する必要のない人生を送ってきたからだった。

須田が持ちあわせていた知識もそういう次元のものだったので、水槽の中身に対する関心は低く、水槽についても部屋を占拠する大きな物体にしか見えなかった。それでも手持ち無沙汰の折りなどに亀やクラゲなどの動きを眺めたり、水槽をコンコン叩くなどしていると、時間を忘れることはできた。会社の中では切れ味鋭く有能な秘書として評判の正田真希子であり、若いＯＬたちからはお局様扱いされて畏れられているあの女は、誰もいないマンションに帰ってきた時に、物言わぬ魚たちに何を語りかけていたのだろう、固まっていそうで気が付くと頸の向きを変えたりする亀を見ていて、須田はそんなことを考えることもあった。あるいは、自分一人のために部屋が一つ提供されていることになっているが、正田真希子は、心の中ではコレクションを一つ増やしたつもりでいるのかも知れず、もしそうであるなら、一応の生存環境と餌は用意してもらっていることになるし、こちらとしてもうるさく吠えたてたりする趣味はないのだから、水族館の住人に加わるだけの資格は持っている、そんな見立ても、まんざら嫌ではなかった。

この日も、時たまそうするように、水槽の前に座って亀の動きを見つめていると、背中になにか感じるもの、振り返っても誰もいないのは当たり前で、正田真希子が帰っていないのなら部屋の中に他の人間がいるはずはなかったが、背中にはっきりと感じられたなにかの気配、抜きん出て鋭い感覚を持ちあわせていなくとも、背後に他人が近づいた時に、背中が感じ取ることは誰にでもあることで、この時に感じたのはそういう感覚であって、間違いなく誰かが後ろにいた。リビングに戻って再びテレビのスイッチを入れると、すでにゴールデンタイムのバラエティ番組が放映されていて、予定調和的に、そして空しく爆笑が起きるが、テロップが台詞を反復したり、画面の中の出来事をわざとらしく説明すれば、そのたびに風景は遠のいていって、いくらザッピングしてみても入って行けそうな世界は、どこにも用意されていなかった。テレビを消して、「調教」が踊っていた場所に戻ってみると、考えねばならない事柄は明々白々、家庭教師名目の仕事をどのように捉えるのか、裕美子とどう関わっていくのかということより他にはなく、任された仕事は裕美子の心を開くこと、それならこの半年で裕美子は明るく振る舞うようになってきたのだから、行き当たりばったりしかやっていないといっても、ビジネスの世界と同じように、結果がすべてと割り切るべきであって、ましてや裕美子が快方に向かっていると母親の川北裕香里や佐々木氏が理解しているのなら、何も悩むには及ばない、仕事は完遂間近、そして須田もお役ご免となるはずが、そんな成り行きが苛立たしく思えてしまうというのなら、別の方向からの検討が必要になるというもので、たとえば心のどこかでこのまま仕事を終わらせたくないとかの気持ち、はっきり言えば十四歳の裕美子に女を見てしまった、裕美子に対する好意が生まれてきているといったあたりの可能性なのだが、それは簡単に否定できた。否定できたにもかかわらず、依然として割り切れなさを感じてしまうのは、自分のあずかり知らぬところで描かれた青写真に対する拒否反応なのか、そもそもの発端は「調教」という言葉に接した時点に生じていたわけで、「調教」という言葉それ自体がいけないのなら、所詮は片言隻句、拘らなければ悩む必要も生まれてこないということか、そんな自問を繰り返していると、嫌なものを嫌と認めた上でそこから目を逸らそうとする浅ましさが、ここでも自覚される。

――どうでもいいんじゃない

誰かがそうささやくのが聞こえた、いや聞こえたように感じた。やっぱり誰かいる。時おり、聞こえてくる、あの声、あの声がここに来ているらしい。

思い起こすと、初めて「声」を意識したのは、裕美子の家に通うようになって間もなく

のことだった。まだ寡黙だった裕美子を相手にして一方的に喋り散らして後、地下鉄とバスを乗り継いでの帰り道、最後はバス停からマンションまで五分ほど路地を歩くことになるのだが、夜になると街灯の明かりが等間隔に並ぶだけの寂しい場所で、最初に感じたのはすぐ背後を歩いてくる気配、それからしばらくすると人が喋ったとしか聞こえない「声」が耳に届いた。意味は為していないから、その時点ではまだ音の段階だったが、感覚の中では紛れもなく、人の声であり、コトンとかパチンとか、擬音語を人間が発音すると、ああいう響きになるに違いない、そんな印象の音だった。繁華街でマネキン男のパフォーマンスを遠目で観察している時、あれって面白いのと尋ねられたような記憶があるのだが、それは一人で眺めていたはずなのに、傍らにいた誰かにそう聞かれたような記憶、あるいは数時間前のこととはいえ、過ぎた出来事を思い出そうとすると、そういう形にしかならない、そんな類の錯覚だったのか、いずれにせよ音の段階を出た「声」が、意味を伴って語りかけてきた時だった。その「声」が、今度ははっきりとした存在感を併せ持って現れていたらしく、親近感を覚えたと言うと的はずれだが、それでも怖いというよりは、むしろふっとほくそえんでしまい、そして

「そうだな、悩むようなことじゃないんだな」

と声に出して応えておいた。

梅雨の晴れ間となった日曜日、須田は正田真希子と近くの河川敷を歩いた。休みの日でも二人が一緒に出かける機会は多くなかった。まず正田真希子が忙しかった。平日は会社から戻る時間が遅い。週末でも持ち帰った仕事にかかり切りになっていることが多く、揃って出かける時間はなかなか取れなかった。

一方の須田はマイペースを守っていた。守っていたなどと言うと、積極的にそうしているような響きもあるが、そういう訳ではない。堅い意志を持って振る舞っているのではなく、あえて言えば、積極的には何もしないというあたりだろう。川北家に通うようになってからは、少し事情は変わってきたが、それ以前なら週末の競馬場通いくらいしか生活パターンの目安はなかったのだから、時間の融通はいくらでもできた。なのに須田のほうから正田真希子に働きかけて何かを誘うことはほどんどなかったのである。須田と正田真希子、二人は一緒に暮らしているといっても、その暮らしぶりは「同棲」とかの言葉で説明